



類外



西院竹舎の主。其著をい。海野は
漢多くよ。案。今。の。雪。成。の。選
者。の。名。を。継。ぎ。ぬ。篇。既。に。四。編
ふ。お。よ。ほ。案。案。や。一。熟。取。の。清。誓
當時百有餘の評者より肺肝
を視る。其。今。葛。盧。公。治。長。の。牛
鳥の語を解するよ。劣ら。し。

裡川

時あとの
向ふ物あり
たぐひぬあ
たぐひぬあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ

獨歩菴

弱きまかり
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ
あゝあゝあ

後士の暮らすは奇なる尾 家も
縁の所より又うらみ 一室の戸
二見くははる 一生を 坊
雷あふく 遠き ぬ
自在を 帳の ねむ
狂家く 坊の あいの 教訓
徳の ねむけぬ 鼎の つききり
えん すすり 酒のおろし 越
白の 二ん、中を まちり
界の ま、野の たを ぬん
又ーても おを けりて 室の 君
川音の 中を ぬりて 宝寺
改も 耳を 素函 けりて 秋も
今 踊る 形を けりて 夜は 口
ちり けりて ぬん ぬん ぬん
梓 平の ぬん ぬん ぬん

父 買明

秋良の花の おもて 八日の
名よ ぬぬぬぬ 此京師
日を かくと 帳を 忘る 暗不
葉様の 糸湯も ぬぬぬぬ 此京師
命知れぬ ぬぬぬぬ 山石 橋
その 日和を ぬぬぬぬ 警目 女
二月十日 ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
伊勢原の 踊の中へ ぬぬぬぬ
あふむ の、ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
は ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ
ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ ぬぬぬぬ

かくらるる此三
 初一化さか
 ち肉一許
 けつち
 化三へ
 雪 雲 念佛
 人若 古人の名
 いのちのむす
 勝勝とよき
 海 一き
 軍のつち
 ちよふも
 ちよふも
 ちよふも
 考一

木樨菴

和々たり
 亦笛 袋衣巻
 杉田の橋 如房
 亮
 菅原の
 後 照月
 鼻の峰
 桐大舎
 故事 地名
 ちよふも
 世平の句佐ハ

うらむとのふゆは
 身と肩のさか
 目くげ
 かくらるる
 秋の田は
 か月の世界の
 百両の
 母の先
 祇園寺
 橋多の
 祇園寺
 門 志の
 又乙女の
 流

谷口樓川

流を最上川
 今さらの牛よ
 河原色く
 母親の
 字返の
 本松へ
 折竹の
 杉田へ
 葱の香の
 かけら
 赤くか
 流

青翠の
仕まへ
よき句候も
よ
初物あり
糸の白
必る上
あつり
あつり
あつり

畝火をくわくく一耳ふくくく
掃くまてくくくと巨砲へ水草のよ
ぬのり子衣敷へ是をる西急小徳
を紗綾を裁くハ蛇の藤を掃
日一清園又あふあふ
あし女の一人物あつと塔をくく
光陰を移の敷あ折つあつ
幼虫の子猫を世ふ西行忌
鳥の夏くくくあつとを殺れ
仕鳥ひ大ユウん吹竹やを
りつりの子物あつりよはは糸
旅の癡まへん本夏子あつ
涌まへ神や一えたりき文
あつとハあつとあつとあつと
あつとハあつとあつとあつと
今ハあつとあつとあつと

伽羅菴

一舟の強き
方かり
山男 山法師
山かせきの人
義のんこつき
そのまははら
お念をき
狐の猫あり
の類
猫よりあつ
尼より
うそをあつ
あつへ

小栗百萬

出陣の玄冥あつりりりり
約合を能強りりりり
川迫くまをる毎子尾のぬれ
大沼のまをるまをる
揚屋町あつりりりり
精進のまをるまをる
下馬の秋虎の草もあつり
三衣目のあつりりりり
田舎のあつりりりり
方夫へあつりりりり
あつとあつとあつとあつと
木の洞子あつりりりり
あつりりりりりりりりり

句中のさうじ地
 才一し
 ぢれ衣より
 世とあふ句
 とかくぢり
 本とすし
 大きく
 句仍ある
 ぢれ見ま
 句よふとあり
 泥坊生酔
 うこと
 仍さし
 ぢれあり

獅子眠

弱き句なり
 無常衣傷の
 句よふあり
 夜舟 渡
 秋情 た近
 配所
 子 愛情
 大群よ
 眉の家
 うさあ
 うさあ

松島ハ日本のうらまゝ夷徒
 新造のさし高の竜宮
 物いさひまゝの敵千白粉
 出雲の海へいふよ埋金
 狐めりらうしる鴨く年忘
 赤浪ハ夏座ありか肥財白
 いとつらゝ裡書く金く庵見寺
 大名とまゝ念佛ハ屋と麻
 西山のりらうま廻ひ信の寮
 ぢりうさ書と妾の中より
 腋排子あると子たのあまら
 放まゝるまゝある 強物
 吟礼の悔くまある入同人
 白眼くうさう因雨ハ比良三上
 因雨の腋く舞する腋のま
 屋のけくまやうつらうと菴

谷口鶏口

又さしとまゝ麻きハ記念の侍よ
 寝舟ハ己れハさきあま生る
 峰とまらうさしうらまき成
 曇き髪ハ麻のせうその情
 蚤の情 さし戒破く 傷
 侍ま夜かゝる 記念届ける
 うさしハ大神村ハままて
 水ハ雪まを新ハ破きと麻衣
 群ま新セハ麻ハ隆くれ
 白をまおの程のま流く
 風の吹くとまと招る 枯柏
 食のさまうさるまの徳侶所
 生髪まうさるまの然うぬ
 流ハけくハ新まらうぬ 圃

新の句を
 感情の句
 生類の句
 仙の句
 仙と
 仙和
 仙和あり
 麻の句
 了とあり
 麻の句
 了とあり
 了とあり

深月巻

強弱あり
 雲上の句
 軍 揚員
 馬 都廷
 旧都 新都
 須戸
 平家の句
 宮方の句
 いちの句
 何の句作

美人の尻のつかりくき山
 祇王も祇女も別る馬深
 糸遊平川をらきく病より
 大さハ佛よ也き枯の神
 後漢の露とくあらん五義殿
 定ま一一人の嘘平目のま
 熟きさる人とくくは守
 経衣と目さく老の鳥深
 乃向人ハ彼世中淋くあへり
 うきうのまのあせる葉枕
 飯まきく付まきくあはる
 あいさく依伽の備と飛く
 兼喰ふ物一つあき料の菖
 羞の世と目まきく毛の短あ
 自裁得くじらち咬みこせる

三上祇丞

あの中じら鬼こある宿
 侍俵の衣半の物とあ
 仕下まきく時わく人の深
 飛籠る舟の舞と寺の景
 鹿く心蓮平あまの太原
 狢狸の穴へも残移る
 酔醒の裸く探る柄物の柄
 桜色一く糸をえ取ま
 茅の破のあ平あめ
 牡丹切るくも尼の称
 人しりあきく文セク母
 唐田八日のあても虹の一
 利る信をせあある時
 翁負と子のうきく
 神軍

おんく

植物 又ハ

思也

名所のゆゑ

よかろ

堂上ハ

あまう

有職と

治く

作

へく

新樹菴

おりのなま

方なり

京地名

まより

まか

伝説地名

よ

あまう

あまう

あまう

あまう

カク

茶の師へち子葉俄に去りてこく
 畑をく 圃をく 圃をく 浮雲
 津代も去つて中一草のまき狩
 抱かちをるる 畑を笑をせく
 下山の児をく 繞りてく
 りのく とありきを食のあをき
 多理の約つてく 茶を引く
 井日ならし 石橋の出来
 衣衣をく 茶をぬ 垣のあ
 傍正のあきぬ 茶をぬ 垣のあ
 茶をぬ 垣のあ 茶をぬ 垣のあ
 先陣も坊主なり 茶をぬ 垣のあ
 を表の埜子圃の 茶をぬ 垣のあ
 肝の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 あまう 茶の圃をぬ 茶をぬ 垣のあ
 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ

花隈多少

春好まをく 圃の茶をぬ 垣のあ
 金枝川神ありぬ 茶をぬ 垣のあ
 煉掃も茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 圃も茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 子の圃も茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 力も茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 茶と茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 世ハ圃も茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 圃も茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 圃も茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 圃も茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ
 圃も茶をぬ 圃の茶をぬ 茶をぬ 垣のあ

好かへ
 東地あま
 こく
 あく
 ちく
 けん
 けん
 てん
 よ

樂成菴

一竹やう
 買明志の
 らのら
 ぶあ
 ちわの
 句作
 ち
 ね

芝居の先んちと老くれ
 夜の寝る人きききき
 之物の方て流れる
 伊勢洲のちわぬりも
 法名のえ上り
 答答のけと余り寺の
 寺屋やけ方ふ
 徳庵五山の孫く
 舟道のふんさ
 主之誰庵の
 病婦子の
 うか
 尺お
 歌止
 川ける
 めつきりと

藤中温克

鬼おや
 大名の門も
 時毎の中
 毎紙と
 能凡
 四十七
 管進
 裁ま
 あり
 本後
 神解
 日和
 高と
 静も

21

伯流 橋
さゆき
ふくろ
水辺蓮尼
母傾塚先
君の句
心も同
考一了
と一

露哉

強弱あり
鶴の句第一の
はりなり
芝居の句
さすき
かき
うひ
泥亀 猪
豆相の
温泉場
江の橋
強念地名

田舎の片り二人まで
被まこむき伯流の朝陽
母つぎく橋のあきふ生
盲馬さる兼海くく
作命くあの石の松よ
市の桶まききりぬ
ち佐助も又へ伊
蓮拵くはぬ
傾塚のまき
虫拵よりくも
園と師と
体拵の上
まかかくて
行る伯流
之伏の峠
かき

北在轉

川芝居の花柄のまの
強念川
一沙生海
橋
東柳
強念ハ寺
候
江の橋
海
貝も吹
高政の
橋
虎

院阿
 考々
 又
 軍
 一
 新
 十
 味
 あり

神田菴

神田菴
 あり
 京
 在
 祇
 本
 軍
 雷
 古
 考

ノくくをきき終極をうそ
 縁分をえん毛之井の通帳
 あくく極きん集子信口尼
 揚をの佛間母の藤新
 林五く一揚をさかきく
 田を松よ所の女官加へく
 きる尾もろ毛くきく志松
 清られてるれハ所き林よ色
 糸蜂の体4一尼の新水
 根岡寺ニ交の系も尺所て
 尻あくく流系色くあまり
 火弁く物さやうか元日
 物干みつりく娘の高めめ
 色少信を信極操の辨
 川名をよ馬のめけ歯包すせ
 山橋今の小買ハ坊坊うく

太村小知

宇津の山あまらゆくの馬の上
 高名のまらるるの子う徳の云似
 け尼の昔ハ僧もな一とを
 基とうてハ終と負ある幸店成
 入舞のをよ髪髪を折あく
 高名の所ハ七布の廣色く
 頻礼のあをとあくきみ平
 母のあるはをなと博く舟
 まらも扇をたまらくと医老
 森り一寺くると今頃通を
 子をよ後待かゆる六二舟
 四十二のをよと拾よ本舟
 蚊よえつあ終子起つ寺きん
 幸路もやうひつき
 願美哉

松島
 奥の地名
 さんくろき
 雪氣梅
 寒念佛
 月の匂
 世流り
 堀舟箱
 買ま
 お造の匂
 二か
 二か

凡夫菴
 強き方なり
 附向うと
 考ふへ
 又傷の匂
 つと入若鹿
 踊首鏡
 娘煮入
 雷きくさ

舟川の橋付つめとさきとちの杖
 又ひとりの窓相え身のなまき
 梅はよ四ノかけけむさきの
 今ふまきとくかきくハ吉原
 菊咲くあきの画巻きるあは
 年よあのをきするまきの
 極楽寺五山の先へおきま
 物あのかげお女の二んつと
 見えへ冷とれぬのまき
 子とち揚る勝越の波
 ほくきたお舟の吹こふ止
 暮怖くくくく正月ま二日
 名音かかくと松戸のやん
 ハ軒をまけハあのはと
 物きやあかり鴨の毛もり

大葦原可因

凡君の痛くくち熱嫁んく
 大盃をらうり筒を待つ
 粧のきき祝あハ和尚う
 ち月の角力まけお取
 眩りあおきくさるうく麻
 今あきのあまきとんか業内
 音びくあまきとんか業内
 本情あまきとんか業内
 空の約母あまきとんか業内
 うき遠江と潮あまきとんか業内
 ちやうち肩と管あまきとんか業内
 金振の志あまきとんか業内
 糸のまきとんか業内
 朽木の似り寸白の足

けふ
 うけ子
 のけき
 のよ
 てとの
 古事
 考
 考

過來菴

ありうあさ
 奈地あさ
 仲居 牙塚
 田 子 母
 倍 世伝
 聖 文 伝
 揚 名 伝
 風 情
 句 句

猪幸のまめさくぬる類より
 あやうの程とく文をなす
 幸傳ともおぼして初傳み入上
 初傳ちの傳りる僕り月額
 右掌傳りて福あしと押さす
 常りて麻せんとなん田中取
 鹿ぬぬのさくぬる類より
 兎の籠もあさとき風をり
 皆ぬまのさくぬる類より
 伝伝系伝伝系伝伝系
 傳りてる芽の傳ハ枯の門飾
 生酔と氣房やうぬえり
 周りて幸院の初初底りぬる
 系傳の初初伝る類の上

志村常仙

川上へ星ハ流きくは伝き
 乃向ての傳の今れく兼所
 初年一社かくる陸奥の秋
 岸の上の清稜の山吹之片
 菜の花の中よ女川の朱橋
 年礼も一なる餅の毒様
 春りぬく焚火よかす大鼓
 春仍りかきく伝る類の牛
 横吉も伝る結城の小伝
 甲斐やれねんと栗と折る
 居居屋の門よ小石の十次
 為こりて伝る類の船
 針ぬの伝る類の火
 通一矢と伝る類の火

いらさきと
 りふの伝
 あらう
 かりうき
 追を地石
 いさうめきさう
 白ふまかき
 ろふまのこま味
 めんくあり
 多々の白濁
 きけふは
 体相うの白
 なが
 ふか
 りま

丙辰夫

強弱をま
 あらう
 句作ハ
 んいさ
 うはう
 右所 或ハ
 柱をま
 窓きけの
 句作
 當時
 族ちりれハ

ぬもすうく物ハちかくてち室寺
 魁の足赤くちくせう寺室き
 神鷲とす神奈川のかり舟
 骨折るまらる日折の生香
 白雨のをれく火串のむりり
 半ちりるまらる修り代りる
 徳舟の徳角うりる徳舟の池
 赤うりるまらるまのな平徳
 凡ちまらるまらるまの二人と
 徳ハ繁くまらるまらるまの
 不化一人物むきかきまらる
 歌内の奇情とありくぬの蛇
 物の言う老意はまらるまの
 川いさう物中いおまの灯の光
 口まらるまらるまの文書らる
 旭さるまらるまの里の豆查汁

木村金洞

池上とせあまらるまの念
 生男と取へる江戸の伊勢堂
 若うりるまらるまらるまの
 尾武考の海いさうまらる
 本もむらりるまらるまらる
 出入ちまらるまらるまらる
 まらるまらるまらるまらる
 尾徳子と列とまらるまらる
 堂のつりまらるまらるまらる
 たき棒のまの白の神の具
 程く排りまらるまらるまらる
 出休のまらるまらるまらる
 徳徳の徳徳ありまらるまらる
 定紋の牡丹とありまらるまらる

八景の句よ
よけりあり
旅く雲上の
少用所家の
下句ありあ
よし
浄曲の句
よし
長句
てとあし
存美志の
え味
ちよ
つら

戒王子

強弱
二つとく
一軒家
白ゆき
白く
地名の多物
めけり
白ゆき
櫻 水辺
京の句
まぢの内の
句よし

子をわいしきまはふ飾と歩高橋
凡音子上三葉の小夜時
春日所こきりより東山
八軒屋のあつたの紙
巻よりきつむ舟の佐田の町
博垂こくとんねの待備
丁金のりもとまへ引板の音
字実と核ふは利の何
從領の石牌ありまの原
影鈴の階の東寺の流し元
又發切りしき羽の形
川雲の弓も八坂の片り
ふと上の中よきつる四葉川
日し脈し流流と島原
麻まなふかき四葉のあつた
流のあつたやめとまへく系

北村葵足

お人志の仕る子あか
白ゆき子血赤藤あつた
お空く空のけりしはへ
けりし試らあつた
死流ハハハも源座
改直つ麻ぬ内定のあつた
信見古抄葉の下み帆めけり
子あつたのあつた
刺ころころハハハ二交系
指したとあつた娘の流し
除の内上戸みあつた
あつたのあつたハハハ
工面車のあつた
あつたのあつた

新教

秋の空とよ
白のついで
考へて

歌

おもしろい
伊達

こころ

あま

康定 伏見

夜舟 牢輿

左近 落城

落人 躍

宿み松地
九あし

雨夜菴

強弱
あり

舟梅娘

医者 尊

両舎を造

こゝ入 松

鮎田 伝

野的

上池のわら

吉祥園

後藤友 大師

夜ふくまの眼ついたらとち百姓
 腰の白根尾を飾るの深幽四
 おちむつ子流傷さるむつち橋
 喧まよ〜〜つてても孝はらうき
 帰集〜〜つてと女あき松の雪
 か持傷〜〜つてと女あき松の雪
 二人よあると伽也つ割縁
 雪の式アッ、琴もよよ、
 多層橋端の雪の白く
 舟梅或ぬハ馬のゆき降
 二人目ハ情つゆく者の縁和
 弓つとを公太、つるあやとり
 空り中、碗碗のたみ、わらわら
 後生さ人、おひあき、さりのあき
 ぬり〜〜と、つて、つて、つて、つて、
 擇よ〜〜と、つて、つて、つて、つて、

峽田菊堂

莖帆へ許る六浦の春はなや
 よい形さると縁せゆる夢の松
 松坂へ目まよふ行ハ竹下の信
 そま〜〜と、つて、つて、つて、つて、
 花の板敷と女川の地まやう
 片のハ、扇かき〜〜と、つて、つて、
 下町ハ、つて、つて、つて、つて、
 袴ま〜〜と、つて、つて、つて、つて、
 月の上のハ、つて、つて、つて、つて、
 田の〜〜と、つて、つて、つて、つて、
 泊所のハ、つて、つて、つて、つて、
 人のハ、つて、つて、つて、つて、
 山、つて、つて、つて、つて、
 上下て、つて、つて、つて、つて、

本々 美怖
金取入言
後山平 坂中
け込の地名
よー
そく
ええー
ゆめー
河原
解極あな
田舎所
多他名
とん
地元の白
よー

号解のの河の妻場を夫婦連
まると来て様よおてお松の内
桶の 稻刈の 羽二重の人
清きくまの人の又一ぬ勘子を
侃侃所 中入かかと指大折
多進の 庭子と長くはるの 噴
全取と合羽の 柴士の 射籠
あくる日の 田中の 羊と候は夜
併所の 田の中と 田極の 巻上り
合羽の せーと ぬれの のー包
吸付く 杖とありく 花あり
多賣く ありく 巻上の 高と持
づる 芝と 襟く けさる 音系
灯と 腫の 葉名の かられ 母
る 碓の 池の 脊えりも 花よこ
吉原の ちるを ともく 地代

星霜菴

おろかる方
世に
あすは
茂士 施薬
清符取
妻 娘
病の
色を 地名の
ゆめー
田舎の
みゆ

熊谷白頭

子も十子なれば本懐の了出あて
るお柳子世法の 辰辰ひ 幼子
大森の 車 象の 茶 齋
四日市 へ へ へ へ へ へ
衣更 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣
牙 歯 ま ま ま ま ま ま ま
持 あり 南 湖 池 中 弘 の 日
除 子 子 眠 き 河 内 の 林 の 飯
茶 茶 春 春 春 春 春 春 春
京 の 寺 橋 持 持 持 持 持 持 持
抄 り 舟 あり て 伸 ち ち 六 の 花
取 の あり 日 本 虎 の 舟 苦
ま と つ ぎ て ち ち ち ち の 不 二 七 老
麻 匹 匹 匹 匹 匹 の 割 ぎ る 佃 代 小 倉

吉原 売

買ふよ

極め

或ハ新うと

永ちをく

よ初あふと

細休さ ぼち

角力丸 乞食

舟扣き 念仏

女目奴 牡丹

京地 若も

よー

クハ四

賑ふさらりの例も常念仏
本屏の香も忘るる頃廣明石
節籠はきくし一癖一きお松
法をを忘るるを他處へ移して
山松々の小唄ハ清浄うく
夕鳥の花ハ改考よよこれら
仏画河のうけく高き山松
味方平一あつと強ハ傾城
淡美の侍を捨ち棹よりて
井筒うらま流のまゝ入れふい
志のち平一乗へ、屯ある大流
安まへは娘うりやけハ初去矣
ふと忘るるを忘るるは
淡美のうらまのうらまのうらま
まハまゝ流りく 更衣
凡世の松の上平不二白く

矩久齋

和っなり

世活もあま

仍るん

子女房

肉多うと

方々へ

買ふよから

よかあま

人名 桜

ふとく

本間保牛

そりまぬ商人通る松の内
ま松の赤並をく入毒毒
酔へ一まの行かく大平
本庫山の松網さび々松
又さうのまの地味をみこして
枕賣師生のまへ二人ま
ろんと時拂土まのりくれ
賣るぬ條春く雀見ま師ま
ままのまのまぬまをまま
綱網よま浦のままよま
旗の目まままの松和
舛松り灯みきまの肉
猫実の地引の中へ焼く苗
まままの地味をみこ小松川

養物... 徳
 とむこひて
 徳るよー
 中...
 野島之保
 後... 地名
 房... 地名
 追... 地名
 の...

播... 山... 森... 産... 日... 岩... 下... 二... 同... 加... 亦... ぬ... 鴨...

無極菴

一...
 松...
 田...
 耕作
 田...
 名...
 多...

坊城雷倫

生... 新... 皆... 結... 歩... 岩... 守... 何... 万... 和... 歌... 旅... 夜... 高...

天竺

大原女

伯原

うらま

尺由

灯

子の句

よー

鳴蟬

あしやま

曲とまへ

はまへ

かー

もろへ

太平菴

弱き方

岩島

蛇駝 寺

蛇ヶ姫姑の

今を

くま

京ま

後今

雲上

春

うらま

いふ

大町連馬

地衣とみけりけりあまの菫の菫
 木原所の者の戸へく仲居た
 馬さく年へをかくと世中
 あまのきりくはハ吉原も
 菫へハ田舟の又へる東海寺
 枕惚かこつりめと川まら
 夜をり内て飯食あまの
 碎とまけと口糸の清と川
 清原の書院のまこやう清師
 村口の遠く白の朧へへ
 百姓の禱と千とりハ田まうえ
 ぬ麻へ秋の片まへ枝城
 日傘をまをせとせのまの
 清へ山の尺ゆる浦の陰
 押清とちあといへぬ門飾
 菫鞠と又抄と星の糸

夜とこあうあわさる菫
 清をけりの間まの日和
 三十の内を画まかく小
 忍びく城下まをせと
 菫へハ秋の片まへ枝城
 似あまく古の菫の庵ま
 船にまけりまをせと
 灯明のまをせと伊波
 何れもあまをせと伊波
 くの整る菫まをせと
 菫へハ秋の片まへ枝城
 多まけりまをせと伊波
 何れもあまをせと伊波
 尾へまをせと伊波

馬海伊堂

被

郭口長

田女長

のこ味

ちよ

面ぬい子と笑ハせる生生の指
け所の家と入へる鞠形り
面舎りちよくと出ては信るる
一船子光のあすまいつくく島
所化原子飛ゆるる三井の秋
雪の併よ美とる松多松寺
およすけくあ君のまいんま
年とち産よ戻る 太く
あの子所皆いきこあき痛並逐
子の服と上下更む膳の中
之信の一も現る今ううく
刺口も恥とあうけをたえし
菘入の蛇も逃いりか茶境
る於理の如ま法あの香炷く
波細く油一枯伊於後島
是あう雲へふつくも岩寺

夜月菴

水野五弦

強弱あん
是ととよ
るま古
えへと
意の句
書まも
あま
揚かま
あま
あま
あま
常強

尋常か神髓の春ゆる三井の秋
繪語の編を讀くやる既院
肌の子も梓ゆ麻のまの向
喰却く感つけの年一の先
一かこまり中一のを廊
季の子より春きくあまより
相年よりても秋のまとけけと
歌舟の伴習子かりりてあまのま
蝶も故もあまの一夏ま経几
控られぬ麻ヶ谷も秋まかせ
万葉も揚念也念ふ内人数
合をるま一良り割月
強飯の付一在屋々麻禱
ま中子たみかき旅跡を舟

のうまはま
 子引あま
 新夏
 徳圃の
 うまも
 うま
 えへま

麻寺よふ麻ふ小燈備くして
 了駕もとまるとの時の化縁も
 毎念り糸の延る河津すく
 神餅は揚屋の一回ふきかり
 永贖くく目つくと流くむ年の善
 去月雨いつくまかろる 檜
 後善善く麻屋を定まき高の下
 流くあうしてしうる地のあらを
 外界り後とと年とまよりり
 淋後ふ留守と流まき縣石
 盗人の善ふ祥善の定まら
 出代ふ善徳の定まら下流より
 ありありの流と物流かきて来り
 子の雲の雨ふ少ける母と母
 うまのうまきか架のふと女
 けせうのうまのそと尼の蓮極く

光風園

一紙や
 かしらり
 地ある景物
 かけ念せき
 勺子
 子あま
 属情
 よ
 ありあま
 あり
 京石
 新夏地名

六 寛美

京まうのゆき水の味
 りくとうむいてる馬本賣
 親ままのあまの旭
 一紙つて流へたむ明石ほ
 せ大中一橋のそる自泉
 作えうの白き芳世のそあ時
 不二の目よらるの由井たの
 り貝の橋吐物と蔵王堂
 法流拾まき海つる蓮悦
 葉より留糸より伯流の一本り
 此らまぬあまのうまの建長寺
 甚新念切のまらふいと
 信るまあ舟の所す麻入
 園子に流るのかまなまら

落葉夕日
 帆 桐一葉
 一蝶、画の
 今朝の春
 今朝の秋
 寒念佛
 とかく
 地ある
 ところ

春の風とあ日よかきり木製の雨
 うーさるるも不二と接糸
 尾と定規よ田と栴くり
 算もつーく毛見もく近る
 ぼ舟漕く内寝の海くく
 松、空よあはまの夜もく
 髪あつとさうり壳のあゆま
 仲人口の村居ーく
 岸のふい火と菴の答る
 いそその音をえくまの下を
 左辻のふの翠簾ハ鏡簾
 借ひくう机とちくくよ昔の徒
 死くよ遊ふ九軒の晦日掃
 五十四郎も馬の脊よ奴
 新塔の世帯まこと舟えり
 踊子、娘、あつめ、いれ、代、あ

